

口なしのうた

言葉が途切れぬ
この世の中で
小異しょういを纏まといて人を撒まく
言葉の隙間は 何を語ろう

口のある者
仄ほのかな音色を押しかけて
音の轟き
上辺にのさばる

口のない者
たゆまぬ音に弾かれて
音色の響き
泡になりけり

されど音色は日を仰ぎ
記しるしとなりて
隙間でうたわん
音より烈はげしい
沈ちんし子となりて

言葉が途切れぬ
この世の中で
小異を纏いて人を撒く
言葉の隙間は 深しんを語ろう

わたしを込めて

言葉が飛び交う
この世の中で

私は叫んだ
君を叫んだ
君が叫んだ

君は私の何だろう

病める時も健やかなる時も
君は私の胸の中
君は私の腕の中

たとえ何処か^{どこ}に行つたって
私は君の後ろ盾
わたしを込めた
君なのだから

そんな調子で明日も叫ぼう
目一杯のわたしを込めて
君に恥じない私となって

私は叫ぶ
まだ見ぬ君を

この胸の中で
この腕の中で

糸をつなげば